山頭火ふるさと館報

第15号
令和7年10月

ごあいさつ

一般社団法人防府観光コンベンション協会
山頭火ふるさと館
館長　末若　智洋

今年九月より山頭火ふるさと館の館長を拝命いたしました末若智洋と申します。

私のキャリアの多くは製造業で、主にコンピュータシステムの開発やロボットを活用した生産ラインの効率化といった分野に携わってまいりました。おおよそ文学とは畑違いの領域ですが、今回このような機会を頂いたということは、今までとは違った切り口で当館を更に盛り上げていくことだと解釈しております。そのためまずは自身が感じていた文学館という少し敷居の高いイメージを払拭し、より親しみやすさや現代的な新しさを取り入れた施設、お子さまからお年寄りまで幅広い年齢層にも喜ばれつつ、コアなファンの期待も裏切らない施設とする事が私の理想です。

種田山頭火は、自由律俳句の代表的な俳人の一人として知られております。明治十五年に山口県防府市で生まれ、放浪の旅を続けながら、日常のささやかな風景や人心の機微を、簡潔に力強い言葉で紡ぎ出しました。「雨ふるふるさとははだしであるく」など、彼の句は今なお、多くの人々の心に響き続けています。山頭火ふるさと館は、そんな山頭火の生涯と作品を後世に残し伝える拠点として、平成二十九年十月に開館しました。当館では貴重な一次資料、関連書籍を所蔵し、常設展示を通して彼の足跡を辿ることができます。また、四季折々の企画展やイベントを通じて「山頭火をうたい、山頭火にしたしみ、山頭火をつたえる」をテーマに山頭火の顕彰や継承を行う交流施設としての役割も果たせるよう努めて参ります。

今後の取組テーマとしては【アナログとデジタルの共存】を考えています。昔ながらのおもてなしなどのアナログ的な温かみは今、逆に重要視されています。一方デジタルネットワークを使ったSNSでの情報発信はいまや必須項目になっています。意図的に「映えスポット」を作り個人に情報の自由拡散を委ねPRする手法は、時に有料広告の何倍もの成果を発揮させることもあります。さらにはVR・AR・MR等の最新技術を用いてイベントや展示などドラマティックに演出しても良いかも知れません。

しかしこれらはただの手段にすぎません。目的は山頭火の顕彰や継承を行い、認知力を高め当館が周辺地域の活性化の一翼を担うこと。それらを常に念頭に置いて最善な活動を選択し実行していきたいと思います。

最後に、いつも皆さまご支援ありがとうございます。これからも山頭火ふるさと館に変わらぬご愛顧頂きますようお願い申し上げます。皆さまのご来館、心よりお待ち申し上げております。

目次

館長あいさつ　……1
企画展　山頭火句集を繙く　……2
企画展　現代によみがえる山頭火……3
寄稿　山頭火三六五句制作秘話　……4
収蔵資料紹介　……5
図書・資料受け入れ報告　……6
今後の企画展情報　……6
今月の一句アーカイブ　……7
前館長退任のあいさつ　……7
イベント情報　……8

企画展 山頭火句集を繙く（ひもと）

開催期間

前期　令和七年四月十一日（金）～六月二十二日（日）

後期　六月二十七日（金）～九月七日（日）

種田山頭火の俳句は現在一万句以上残っていますが、そのうちの約七〇〇句が句集『草木塔』に収められています。この企画展では、句集『草木塔』の元となった山頭火自選の七冊の句集について、どのように編まれたのか、またどのような性格の句集なのか詳しく紹介しました。前期には第一から第四句集、後期には第一句集、第五から第七句集をご紹介しました。また、山頭火の新発見ハガキも公開しました。

第一句集『鉢の子』（昭和七年六月二十日）

経本仕立てで、表紙は藍色の和紙に浮き出しで菱と菊花を合わせた模様を入れる。本文は赤い罫線とともに一ページ三句印刷される。句は八十八句を所収。大正十四（一九二五）年、熊本の味取観音堂での句から、昭和七年四月ごろまでの行乞の旅の中で詠まれた句を収める。

昭和六（一九三一）年末に熊本を出た山頭火は、熊本以外に落ち着いて住める場所を探していた。結庵費用調達のために句友から援助をもらい、その返礼品として出版されたのが第一句集『鉢の子』である。

第二句集『草木塔』（昭和八年十二月三日）

第一句集と同様に経本仕立て、罫線を引いて一ページ三句印刷される。表紙の題箋は展示資料では木版印刷。本文は手漉き和紙（出雲紙）を使用。第三句集以降同様、島根の手漉き和紙製作者でのちに人間国宝となる安部榮四郎によるものと思われる。三〇〇部、定価七十五銭。

扉には収録句から一句選んで揮毫している。この形態は第七句集まで受け継がれる。

句は二部構成で八十八句収められている。

・「其中一人」四十七句（昭和七年九月～昭和八年七月）

・「行乞途上」四十一句（昭和七年四月～昭和八年六月）

巻末には昭和八年十月十五日付けのあとがき「其中庵から草木塔まで」を付す。

第三句集『山行水行』（昭和十年二月二十八日）

これまで同様経本仕立て、一ページに三句、両面に印刷されている。表紙の題箋は木版印刷。本文には安部榮四郎による出雲紙を使用、天地アンカット。三〇〇部、定価八十銭。

第二句集同様、扉に揮毫がある。

句は二部構成で一四一句を収める。

・「雑草の中」一〇三句（昭和八年七月～昭和九年三月、昭和九年五月～十一月）

・「旅から旅へ」三十八句（昭和八年六月～昭和九年四月）

巻末には昭和九年十二月三日付けのあとがきを付す。

第四句集『雑草風景』（昭和十一年二月二十八日）

これまで同様経本仕立て、一ページ三句印刷。本文には安部榮四郎による出雲紙を使用、天地アンカット。三〇〇部、定価七十銭。

扉には揮毫がある。

句は昭和九年秋から昭和十年秋までに、其中庵での生活の中で詠まれた七十二句を収める。

巻末のあとがきは昭和十年十二月二十日付け、広島にて書いたものだろう。

第五句集『柿の葉』（昭和十二年八月五日）

これまで同様経本仕立て、一ページに三句印刷。反対の面には木村緑平句集『柿の葉』が印刷されている。本文には安部榮四郎による出雲紙を使用、天地アンカット。三〇〇部、非売品。

緑平も山頭火もそれぞれ扉に揮毫する。

山頭火の句は、以下のような一一九句を収める。

・昭和十年十二月から昭和十一年七月にかけての旅で詠まれたもの（四十一句）

・旅の後、其中庵にて詠まれたもの（七十八句）

山頭火句集の方には昭和十二年夏のあとがきを付す。

第六句集『孤寒』（昭和十四年一月二十五日）

これまで同様経本仕立て、一ページに三句、両面印刷。題箋は木版印刷。本文には安部榮四郎による出雲紙を使用、天地アンカット。三〇〇部、非売品。

扉には揮毫がある。

句は三部構成で一一七句を収める。

・「銃後」二十五句（昭和十二年～十三年）
・「草庵消息」五十六句（昭和十二年春～昭和十三年夏）
・「旅心」三十六句（昭和十二年末～昭和十三年夏）

巻末に、昭和十三年十月のあとがきを付す。

第七句集『鴉』（昭和十五年七月二十五日）

これまで同様経本仕立て、一ページに三句印刷。題箋は木版印刷。本文には安部榮四郎による出雲紙を使用、天地アンカット。反対面に木村緑平句集『雀』を印刷している。二〇〇部、非売品。

扉には揮毫がある。

山頭火の句は、昭和十三年秋から昭和十四年十月までの七十二句を収める。

巻末に、昭和十五年二月のあとがきを付す。

【展示資料一覧】すべて当館蔵、●通期、○前期、◎後期
●第一句集『鉢の子』（種田山頭火、発行所：三宅酒壺洞、編集兼発行者：木村緑平、昭和七年六月二十日）、◎『層雲』第二十二巻第五号（昭和七年九月・層雲社）、●【掛軸】木の芽草の芽あるきづける（種田山頭火）、●【掛軸】くにさきは仁聞の国巌峰つらなり（三宅酒壺洞）、●【掛軸】両子山をうらから六月の蝉なく（三宅酒壺洞）、●【短冊】句を削り秋の蚊をうつ一字のむつかしさ（荻原井泉水）、●原農平宛てはがき（種田山頭火、昭和五年三月十三日）、●原農平宛てはがき（種田山頭火、昭和五年四月六日）、●原佐一宛てはがき（種田山頭火、昭和七年一月二十九日）、●原佐一宛てはがき（石原元寛、昭和七年二月二十六日）、○第二句集『草木塔』（種田山頭火、発行所：其中庵三八九会、発行兼印刷製本者：大山澄太、昭和八年十二月三日）、○『層雲』第二十三巻第九号（昭和九年一月・層雲社）、○【色紙】お正月のからすかあかあ　山頭火作（大山澄太）、○第三句集『山行水行』（種田山頭火、発行所：其中庵三八九会、発行兼印刷製本者：大山澄太、昭和十年二月二十八日）、○【拓本軸装】山あれば山を観る／雨の日は雨を聴く／春夏秋冬／あしたもよろし／ゆふべもよろし（拓本：水落龍勝、揮毫：種田山頭火）、○第四句集『雑草風景』（種田山頭火、発行所：杖社、発行印刷製本人：大山澄太、昭和十一年二月二十八日）、○【短冊】空へ若竹のなやみなし（種田山頭火）、◎第五句集『柿の葉』（種田山頭火、発行所：杖社、発行印刷製本人：大山澄太、昭和十二年八月五日）、◎【短冊】旅は笹山も笹のそよぐのも（種田山頭火）、◎第六句集『孤寒』（種田山頭火、発行所：杖社、発行印刷製本人：大山澄太、昭和十四年一月二十五日）、◎【短冊軸装】遺骨を迎へて　ぽろぽろ流るる汗が白い函に（種田山頭火）、◎第七句集『鴉』（種田山頭火、発行所：杖社、発行印刷製本人：大山澄太、昭和十五年七月二十五日）

種田山頭火
没後八十五年記念企画展
現代によみがえる
山頭火

開催期間　令和七年九月十二日（金）～十二月十四日（日）

明治から昭和初期を生きた放浪の自由律俳人・種田山頭火は、その人生や作品の特異性から、現代でもさまざまな分野でモチーフとして用いられています。この企画展では、山頭火をモチーフとした作品や商品として

・らーめん山頭火
・日本酒　山頭火
・漫画『月に吠えらんねえ』（清家雪子作・講談社月刊アフタヌーン刊）
・ゲーム「文豪とアルケミスト」（©2016　EXNOA LLC）

を紹介し、現代の人々が山頭火をどのように解釈しているのか、また山頭火をどのように表現しようとしているのかを探ります。

企画展の開催にあたり、下記の方々にご協力いただきました。謹んで謝意を表します。（敬称略、順不同）

らーめん山頭火全国統括本部（株）アブ・アウト
金光酒造株式会社
株式会社クリーク・アンド・リバー社
清家雪子
芥陽子

【展示資料一覧】
しおらーめん商品サンプル（㈱アブ・アウト蔵）、カップ麺「山頭火　旭川とんこつ塩」（製造：日清食品株式会社）、「純米吟醸　山頭火」ビン（金光酒造㈱蔵）、「純米吟醸　山行水行」ビン（金光酒造㈱蔵）、「純米大吟醸　山頭火　日々の酒　三六五句」ビン（金光酒造㈱蔵）、掛軸「ほろほろ酔うて木の葉ふる」種田山頭火（当館蔵）、「其中庵」箱（当館蔵）、種田酒造場徳利（当館蔵）、『月に吠えらんねえ』コミックス第一巻（清家雪子・二〇一四年四月・講談社・個人蔵）、『草木塔』（種田山頭火・昭和十五年四月・八雲書林・当館蔵）、第一句集『鉢の子』昭和五十八年十二月複刻版（ほるぷ出版・当館蔵）、『尾崎放哉集　大空』（春秋社・大正十五年六月・当館蔵）、【掛軸】「分け入っても分け入っても青い山」（種田山頭火・当館蔵）、【掛軸】「分け入れば水音」（種田山頭火・当館蔵）

寄稿
山頭火三六五句制作秘話

金光酒造株式会社
代表取締役社長　金光明雄

金光酒造(株)は大正十五年創業、来年一〇〇周年を迎えます。当社酒蔵は小池酒場が明治二十九年より酒造りをしていた酒蔵で、何らかの理由で廃業されたため、当社初代社長金光市之進(イチノシン)が酒蔵を買い取り、大正十五年より酒造りを始めました。

山口市嘉川の地酒としての銘柄は黄金の波(コガネナミ)でしたが、当社三代目社長大林重義(山頭火が酒造りをしていた大道の酒蔵)の時に山頭火ふるさと会(代表窪田耕二様)より、山頭火の名前で酒を発売しないかとの申し出があり、昭和五十年十月九日付で山頭火の商標を取得し販売を開始しました。当初はまだ山頭火の名前も知られていなく、あまり売れませんでしたが、俳人山頭火の名前が知られる様になり、売上げも順調に伸びてきました。その頃より山頭火ふるさと会との交流により、毎年五月に当酒蔵内にて新酒の会が開かれ、お酒山頭火の名前が知られる様になりました。新酒の会は約二十年続きましたが、毎年五十人前後の方が来社され盛大に行われました。その後、山頭火ふるさと会は休会となりましたが、会長の窪田さんとの交流は続いておりました。

山頭火三六五日ラベルの構想は十年以上前より考えていましたが、簡単には実現の見込みもなく時がたちました。ある時どうしてもこのラベルの商品を発売したくて窪田さんに相談したところ、即賛同していただき、これは大変おもしろい企画だから、がんばっていっしょに勧めようという事になり一安心した矢先に、残念ながら窪田さんが急病で亡くなられました。中止しようとも思いましたが、せっかくの企画なので私一人で進める事とし、とにかくやれるだけやってみて、ダメならあきらめようと考えました。約半年かけて三六五句＋閏年の一句の、私からして山頭火らしい句を選定し、一時休止の考えもありましたが、せっかくやり始めた事でもあり、長年の思いをなんとかしてやりとげる決意のもと選句を進めました。三六五句の選句は大変で、句のイメージが山頭火らしいか、又、ラベルの背景が合うかどうかで悩みながら、さらに三～四か月かかりやっと完成しました。

種田山頭火が詠んだ句の思いと合わせて、純米大吟醸酒をゆっくり味わっていただき心を癒していただければと思います。山頭火が詠んだ句にはこの三六五日ラベル以外にもたくさんのすばらしい句がありますが、今後いつか第二弾として発売する事が出来れば良いと思います。また山頭火とは同じ酒造りの縁もあり、当時の種田酒造場のお酒の名前を調べてみましたが、どうしてもわかりませんでした。わかればその名前で発売したいものです。

今後も山頭火の名前を大事にして、皆様に安心して喜んで飲んでいただける酒造りを続けてまいりますので、どうか引続きご支援・ご協力いただきます様にお願いします。

▶山頭火ふるさと会　新酒の会

▶山頭火三六五句　十二月三日のラベル

収蔵資料紹介

大正初期に山頭火が参加していた防府の俳句結社「椋鳥会」句会資料を二点紹介する。

凡例

一、翻刻は原文どおりとしたが、旧字体は現行の字体に改めた。

句会資料　月

烏

1 ポプラ高に明月を校舎木の香する　○二十知
田

2 月今宵傘張も喜ぶを兼好何すれど　○耐愚
田

3 明月の何広告此の町尻に　○烏城
耐二

4 殉死論倦ずせるを月の雨となり　○○田螺公
耐二田烏

5 今宵舟遊月のよかりし櫂洗ふ　○○○○鐘眠

6 耶馬渓の宿明月に一行の句座
鐘

7 月皎々漁火黙々村処〳〵

8 尻長の客明月を帰る眠る野や　○烏城
烏

9 老杉下路狭な名月浴せたり　○鐘眠

10 寺前月に更けしが尚二三砲見居る
二田鐘

11 名月の花と見る激潮の白き沫　○○○耐愚
田鐘

12 大きな丸い月がと軒の子が母に　○○二十知

13 名月や潮江の奴に流れたり
二

14 野営訪ふを明月の哨兵コヽに延ぶ　○烏城
耐二烏

15 後園に烟るもの芋の月更けて　○○○田螺公

16 明月に酌む旗亭女松磨ぎある

17 山月を吐かんとして雁飛ぶこと黒し　○耐愚

18 祭近し明月に風船試む由
耐烏

19 月今宵青き女よ梨剥がむ　○○田螺公
耐

20 御陵地の今宵に相応ふ月となり　○鐘眠

21 月清し君は踏んで返れ我は枕にす

22 辻の広告橙明月に客を呼ぶ

23 三対座名月に山迫る窓

採点表

	鐘眠選	田螺公選	耐愚選	烏城選	二十知選
田螺公			○○○	○○	○○
鐘眠		○	○○	○○	○
烏城	○	○			○
耐愚	○○	○○			○
二十知	○	○		○	

七点　田螺公　六点　鐘眠　五点　耐愚
三点　二十知　三点　烏城

句会資料　蚊帳

1 今宵自ら蚊帳吊れば火事の鐘聞ゆ　不泣子

2 蚊帳青う寝覚よき夜の稿つげり　山頭火

3 廊下冷たき触覚や月に蚊帳ゆるゝ　不泣子

4 瀬音高うくつろぎ蚊帳や長途来し　烏城

5 脱け出でゝ舷（ハナ）端涼み居り船の蚊帳

6 蚊帳越しに海ゆらゝ月の汽船待つ　山頭火

7 亡児の寝くせなど母は蚊帳の香に　烏城

8 蚊帳の香の快き旅寝句を思ふ

9 蚊帳そよと吹く風も眠気誘ふほど　山頭火

10 病室ヒソと蚊帳の外つくねんと灯が　蓮の門

11 温泉（ユグセ）癖慣るを蚊帳に明日の袂□など

12 寝得ぬまゝ蚊帳出でぬ闇に見分く花　不泣子

13 蚊帳の破れ縫ひ居れり同下瓜守が

採点表

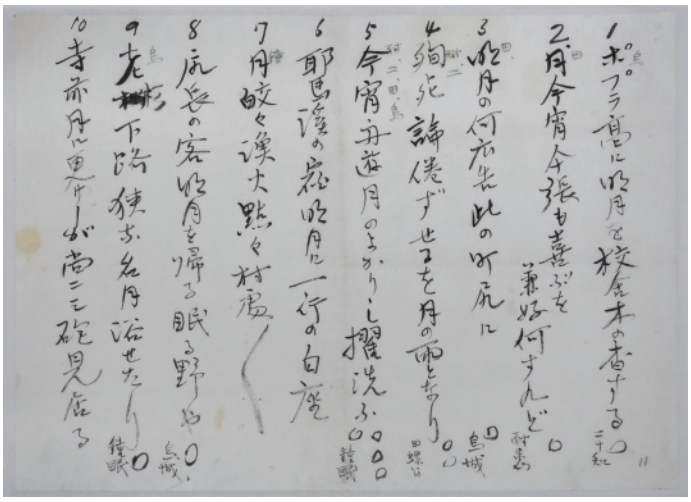
	烏城	山頭火	蓮の門	不泣
烏城			○	○○
山頭火	○			○○
蓮の門	○	○○		
不泣	○	○		

解説

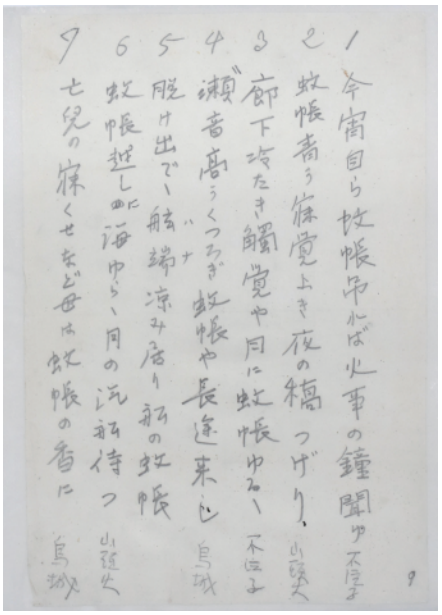
どちらも成立年不明だが、「月」題の句会資料については山頭火が旧号「田螺公」を用いているため、大正二年三月の改号前、「蚊帳」題の句会資料については大正二年三月より後と推定できる。

「月」題の資料は、種田田螺公(山頭火)、小田烏城、斎藤鐘眠、二十知、耐愚の五名が句作、選をしている。句の右上に採点者、句の下に採点の○印と作者の名を入れる。付属資料として、五人それぞれが句を提出した際の原稿五枚がある。

「蚊帳」題の資料は、種田山頭火、浴永不泣子、梅田蓮の門、小田烏城の四名が句作、選をしている。資料には採点の印がない。また採点表も表のみで結果が記されていないが、不泣が四点、烏城と山頭火が三点、蓮の門が二点を獲得している。（山頭火ふるさと館　学芸員　髙張優子）



▲句会資料　月



▶句会資料　蚊帳

図書・資料受け入れ報告

令和七年三月から八月までの間に寄贈いただいた資料をご紹介します。

寄贈

○牛久竹男様より「昭和二十四年九月五日消印原農平宛て書簡（寄稿のお願い・荻原井泉水先生重六記念書会開催案内・荻原井泉水住居確保のための募金のお願い・「瓦の会」趣意書）」

○岡島溫様より『山頭火　三河知多の旅　再訂版』

○木下信三様より「木下信三氏撮影写真アルバム一（モノクロ六十枚）」他二十点

○富永鳩山様『月刊書道競書雑誌　全書芸』通巻八九六号、八九七号、八九八号

○西野善男様より墨書「墓の草とって掃いて春の山の夕陽　雲仙にて」（三宅酒壺洞）、荻原井泉水墨書

○水落龍勝様より「近木圭之介墨書一式」他五点

御著編書

○子伯様『遺句集『無限から』『From Infinity』』

○自由律俳句協会様『自由律俳句協会機関紙　自由律の風』第七号

○「青穂」事務室様『青穂』五十六号、五十七号

○富永鳩山様『自由律俳句クラブ群妙』第三十八号

○吉田稔様『音楽作品台本集　組曲「吉田松陰」』

今後の企画展情報

企画展「自由律俳句に詠まれた出会いと別れ」

令和七年十二月十九日（金）～令和八年三月二十九日（日）

自由律俳人・種田山頭火は大正十五年に一笠一鉢の姿で行乞の旅に出て以降、生涯を放浪の旅に捧げました。旅に生きた山頭火は出会いや別れについて詠んだ句も多数存在します。本企画展では、山頭火ら自由律俳人が詠んだ出会いや別れ、旅立ちに関する句を直筆資料とともに紹介します。

今月の一句アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和七年

四月　ほんにお山はしづかなふくろう

昭和十四年四月

昭和十四年に湯田温泉を出立した山頭火は、広島の句友・大山澄太とともに広島県三原市の佛通寺に参拝しています。「お山はしづかな」に対して「ほんに(本当に)」と深く肯定しており、夜の佛通寺の静かさと厳かさが伝わります。

五月　ふるさとの言葉のなかにすわる

昭和七年五月

九州で行乞の旅を行い、第一句集の出版準備を進めていた時期に『行乞記』に記された句。山頭火が防府にいた期間は短いですが、言葉のなかに「すわる」という表現から、故郷の言葉が彼の中で確立していたことがわかります。

六月　ふつと逢へて初夏の感情　昭和九年六月

昭和九年の句。掲句を記した前日には『層雲』同人の渡辺砂吐流と約二十年ぶりの再会を果たしています。「初夏の感情」は珍しい表現ですが、日記に「逢へて嬉しい」とあるため、砂吐流に会い晴れやかな気持ちになったことの表れではないでしょうか。

七月　暮れてなほ鳴きつのる蝉のかなしくもあるか

昭和十四年七月

湯田温泉の風来居を拠点とし、中原呉郎や和田健らと交流を深めていた時期の句です。同年七月末には妹の元を訪れ、九月には四国に向けて旅立っています。夕暮れ時にもかかわらず懸命に鳴く蝉に残り僅かな己の人生を重ね、悲哀に暮れていたのかもしれません。

八月　みんな寝てしまつてゐるポストのかげがはつきり

昭和八年八月

小郡の其中庵から長門市仙崎までの旅を終え、帰庵した日の句。当日は帰庵後、句友の国森樹明を訪ねており、その帰り道について詠んだ句と考えられます。ポストを照らしていたのが街灯か月光かは定かではありませんが、真夜中の暗さと際立つポストの対比が印象的な句です。

九月　わかれて遠い瞳が夜あけの明星

昭和十年九月

前年の旅の失敗もあり、精神的に不安定な山頭火の活力となっていたのが友人との交流でした。掲句が書き留められた当日の日記では、国森樹明の心境を慮っています。「夜あけの明星」は明けの明星のことで、樹明が帰宅する寂しさを金星に重ね、思いに耽っていたのかもしれません。

退任のごあいさつ

大本　学司

このたび、八月末日をもって山頭火ふるさと館長を退任いたしました。

一年五ヶ月という短い期間ではございましたが、在任中におきましては各方面からの温かいご支援・ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

山頭火ふるさと館は今年で開館八年目を迎えております。令和六年度末には開館以来の来館者数が十六万人となり、年間ではおよそ二万五千人程度の来館者数を維持しています。これも平素から並々ならぬお力添えをいただいております皆様方のお陰であり、衷心より感謝申し上げます。

これからも山頭火ふるさと館は、市民の皆様はもとより県内外から老若を問わず幅広い年齢層の方々にご来館いただけるよう、企画内容や運営方法にさらなる創意工夫を凝らしながら、多くの人から愛される文学館をめざし、職員一同、日々の運営に努めて参ります。今後も変わらぬご厚誼を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

◆これまでのイベント◆

4月	2日	第7回フォトコンテスト作品募集（～10月31日まで）
	29日	うめてらす誕生祭コラボ
5月	1日	第8回自由律俳句大会作品募集（～10月31日まで）
	18日	企画展関連講座「展示資料を繙く」
6月	11日	自由律句を学ぶ会
	18日	山頭火を学ぶ会
	28日	自由律句で遊ぼう
7月	9日	自由律句を学ぶ会
	16日	山頭火を学ぶ会
	21日	親子でワークショップ「りんりんふうりんづくり」
	26日	自由律句で遊ぼう（夏季特別講座）レジン作り
8月	7日	自由律句で遊ぼう（夏季特別講座）ミニチュア掛け軸作り
	13日	自由律句を学ぶ会
	23日	自由律句で遊ぼう（夏季特別講座）ふうりんづくり
9月	1日	自由律句を学ぶ会
	17日	山頭火を学ぶ会
	27日	自由律句で遊ぼう
10月	8日	自由律句を学ぶ会
	11日	第4回山頭火ふるさとまつり 防府商工生による山頭火カフェ
	12日	自由律句を学ぶ会 令和7年度書道コンクール表彰式、くるみボタン作り
	13日	第4回山頭火ふるさとまつり 山頭火謎解きイベント、山頭火マーカーペン習字体験
	15日	山頭火を学ぶ会
	25日	自由律句で遊ぼう

◆これからのイベント（予定）◆

11月	8日	防府商工生による山頭火カフェ（すごいぞ防府）
	12日	自由律句を学ぶ会
	22日	コリントゲームで遊ぼう
12月	3日	山頭火生誕記念イベント（～7日まで）
	6日	フォトコンテスト表彰式
	10日	自由律句を学ぶ会
	20日	自由律句で遊ぼう
	24日	山頭火を学ぶ会

Xのアカウントを開設しました！

企画展やイベント情報のお知らせや
自由律俳句の紹介をしていきます。
ぜひフォローいただけますと幸いです！
@santoka_kan

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間
午前九時～午後五時
（ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後四時三十分まで）

休館日
毎週火曜日（祝日の場合は次の平日）
十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料
無料
※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス
防府駅てんじんぐちから約一・五km
まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m
山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場
普通車用三台、身障者等用二台（ふるさと館横）
無料観光駐車場二十五台（ふるさと館斜前）

山頭火ふるさと館報
第15号
令和７年10月３１日発行

編集・発行
一般社団法人
防府観光コンベンション協会
山頭火ふるさと館
747-0032
山口県防府市宮市町5番13号
電話　0835-28-3107
FAX　0835-28-3113